

安全管理セッション レポート

①はじめに

静けさやすがすがしさといった自然の魅力は、助けてくれる他者がいないという意味でリスクとの裏腹です。挑戦に価値を置く OMM の精神自体も、裏を返せば挑戦がリスクになりえます。このような競技環境の中で、大会主催者は競技者が 2 日を通じて競技ルールに則り行動すれば自らで対応可能なコースを設定するとともに、参加者が注意しても遭遇してしまう高いリスクを排除するように努めています。同時に、参加者が自力で対応可能なリスクについては過度に排除しないようにしています。たとえば、不意に落ちてくる可能性のある落石は参加者の注意では回避できない可能性が高いものです。一方で、不整地に脚を取られて捻挫・骨折といったリスクは参加者自身のリスク回避が可能です。参加者自身もレース中のリスク回避の主体なのです。

こうした OMM の精神は、日本では必ずしも一般的ではありませんが、大会が回を重ねるにつれて根付いているという実感があります。一昨年度に実施したアンケートでもこの考えは概ね支持をされています。一方で、その現状に甘んじることなく、主催者と参加者が協働して自然のリスクにチャレンジするイベントを今後も作りあげていきたいと考えています。

②安全面についてのレースの概況

事前のリスクアセスメントでは、以下のリスクについて、参加者は一般的なアウトドアスポーツの経験や知識から予測することが困難か、現場で感知することが難しいと考えました。

- a)特に林道脇の崖とそこでの落石
- b)特に林道脇で法面の上部が崩れてオーバーハングしている場所での滑落
- c)増水時の河川の徒渉：転倒の危険と全身が濡れることによる低体温、および溺水
- d)背の低い林内の植生による目や顔のけが

転倒による肋骨の骨折が1件（または2件）、病院での処置が必要な切創がありました。それ以上の大きなけが、事故はありませんでした。参加者、主催者が協働してリスク対応をした結果だと考えています。

③安全上の課題

一方で課題もいくつか見られます。

a)必須装備について

今大会でもフィニッシュ後の装備チェックを実施しました。少数ではあるものの、必須装備の不携帯による失格が発生しました。好天のもとでは必要を感じない装備もあったでしょう。しかし、必須装備はもしもの時のためのダメージコントロールにあるのだということを今一度、ご確認ください。

ペアの分離に近い状態もマーシャルから何件か報告されています。離れている時に何があるか分かりません。二人一組の競技であることがリスクをコントロールする上でどのような役割を果たしているかについて再度意識していただきたいと思います。

今大会では交通量の多い道路を1日目のスタート直後に横断します。その際、道路部分で荷物を整えたり、その先の地図を読むという光景が見られました。自動車側から警告を受けるという場面も見受けられました。リスクという点では自然も、交通も同じです。場所のリスクに対する敏感さを常に発揮していただきたいと願います。

④制限時間後の連絡体制について

UK の OMM では一日目の 20:00 以降、特にチームと連絡を取ることはしません。野営装備を持っている OMM では、参加者が適切な判断を下しさえすれば、夜を過ごすことは特段リスクの高い行為ではありません。私も UK での OMM 参加の折に、まだ明るいうちから、風の強い丘の上を避け、谷間の樹林の中でさっさとテントを張っているチームを見たことがあります。一方で、日本では主催者の安全上の責任が強く求められる傾向にあるため、一応電話連絡で安否確認しています。参加者が競技中電話による外部との通信を禁じられている中で、制限時間後とは言え、チームと連絡を取る運用は必ずしもうまく機能していません。対象となるチームは多くはありませんが、1日目の本部との連絡については今後の検討課題としたいと思います。同時に、2日目の制限時間後に確実にチームと連絡をとる体制についても検討課題だと考えています。

⑤おしまいに

日常生活の場では、法律や倫理感によって安全が守られています。また、日本では管理者の安全配慮義務が強いので、施設管理者や行政はリスク排除に傾きがちです。それは私たちの安全を守ってくれる反面、リス

クに対する敏感さを損ねていると感じていることもあります（③に触れた車両通行への安全など）。しかし、自然の中ではリスクが十分管理されていません。その中で活動する時、自らリスクに対して準備し、自然の中で健全な判断力（sound mountain judgment）が必要です。OMM が、皆さんが自然の中のリスクと向き合う経験の場となれば幸いです。